

# 「内的成長」社会へ

うえだ のりゆき  
上田紀行

私たちは、この社会の中で様々なレベルで生きている。まず一人一人の個人として生き、家族の一員として生きている。それは私たちにとって最も「近い」世界であり、近い風景という意味で「近景」とも言うべきものだ。他方で私たちは日本という国家の一員として生きている。これは「遠景」と言ってもいい。その「近景」と「遠景」の中間に、いわば「中景」としてコミュニティーは存在してきた。それは村や町のような地域社会であり、子どもたちが集まる学校であり、仕事の場としての会社などだ。しかし、そうやって挙げてみると、現在の日本で力を失ってきているのがこの「中間社会」だということは明白だろう。かつて地域社会や村が私たちを支えてきた時代があった。しかし、今地域社会に支えられて生きていると思うている人がどのくらいいるだろう。かつては学校もコミュニティーの中心だった。かつての会社も私たちの面倒を何から何までみてくれるものだった。仕事、お金、福祉、そして希望。しかし、現在の会社はもはやそうではない。会社と私た

ちのあの揺るぎない信頼関係はもはやそこにはないのだ。

こうした「中間社会」の凋落は、

ちやうど

新自由主義的なグローバルイズムによってますます激

↓  
ネリバリズム  
キ-ア-ド  
P220

しいものとなっていく。会社で隣に座っている同僚と私は生き残りをかけて争うライバル  
どうした。社長も会社の業績が一番いいときに会社を売って、億万長者となって逃走して  
しまう。その会社にいる間にできるだけ効率的に利益を引き出し、それができなくなれば  
報酬の高い会社に移ればいい。学校という場も、生徒一人一人の効率性を高める場として  
考えなければいけない。そして地域社会もその中で崩壊していく。もはや昔のムラのような  
な、一人一人の自由を許さないような地域社会は私たちにとって抑圧にしか思えない。し  
かしそこから解放された都会の地域社会も既に地域社会とは呼べないような、隣に誰が住  
んでいるかも分からないような社会となってしまった。

そのように、私たちは今かつてのコミュニティの、「中間社会」の崩壊の時代を生き  
ている。それは、コミュニティに支えられることなく、私たち一人一人の「個」がむき  
出しにされている社会だと言ってもいい。それは非常にリスクの高い社会でもある。今ま  
でならば、会社の専門家がお金を動かし、<sup>\*</sup>投資を行っていた。これからは一人一人が投資  
家だ。そしてそこで利益が得られれば私のものになるが、大損しても誰も守ってくれない。  
しかし、冷静になってよく考えてみれば、私たち一人一人は投資の専門家ではないから、



そのような素人に投資を任せれば、専門家の思うつぼになることは目に見えている。しかしそれが私たちの社会における「自由」である。「個」は中間社会から解放される代わりに、すべての責任を負わせられるのである。

人間はそもそも「支え」のない社会には生きていけない存在だ。しかし、そこに支えるべき「中間社会」はもはやない。ならばどうしたらいいのか。グローバリズムを論ずるときに、グローバリズムとナショナリズムや宗教的原理主義がコインの表裏だと言われるのは、そうした時代状況によるものだ。中間社会に支えを求められない私たちは、「遠い」レベルであつた国家意識に支えを見出みいだそうとする。コミュニティへの帰属意識が失われ、むき出しになつた「個」は、国家や宗教への帰属意識で何とか帰属感を満たそうとし、そこにナショナリズムや宗教的原理主義が生まれてくるのだ。

グローバリズムとナショナリズムや原理主義とはそもそもは全く正反対のものである。国家の国境を越えていこうとするグローバリズムは、国家という一つのまとまりを解体していく方向性を持っている。しかし、グローバリズムが進展すればするほど、\*皮肉なことに、現実にはナショナリズムや原理主義の意識が各国で高まっていく。

しかし、世界におけるこのグローバリズムとナショナリズム・原理主義の併存は極めて重大な問題を含んでいる。

それは一つにはナショナリズムや原理主義が常に暴力性へと展開しやすいという構造を持っていることであり、それに関しては多くを指摘する必要はないだろう。しかしそれ以上でここで注目しておきたいのは、グローバルリズムもナショナリズムも「多様な意味」の圧殺の上に成り立っているということだ。報酬という「数字」の上に立脚しているグローバルリズムは私たちが多様な意味を生きていることを捨象するシステムだ。そしてそれと同様に「私たちは○○人だ。」といった同一性の意識のみを強調するナショナリズムや、一つの宗教的な立場のみを至高のものとする原理主義もまた、私たちが多様な意味を生きていることを忘れさせるシステムなのである。

「数字信仰」とは「生きる意味」を捨象して、横断的に通用する「数字」で物事を解決しようとする》ことである。この「数字」のところを「日本人」と入れ替え、「生きる意味」を捨象して、横断的に通用する「日本人」の意識で物事を解決しようとする》とすればそれはナショナリズムとなる。つまり、私たちの今向かっている社会は、「生きる意味」を捨象して、自分の頭も感性も使わずに、「数字」や「日本人」といったレベルで物事を解決しようとする》ような社会なのである。

私たち一人一人が固有の「生きる意味」を持っているということは、一人一人の「ワクワクすること」と「苦悩」を生きているということである。他者を尊厳あるものとして見



るということとは、他者の「ワクワクすること」と「苦悩」に対して鋭敏な感受性を持つということだ。そういった他者の「生きる世界」への内的感受性を育てる方向性ではなく、「数字」や「日本人」といった、頭も心も使わなくていいレベルで何とか社会の統合をはかろうとする、社会の活性化をもたらそうとする。「このごろの社会は思いやりを欠いていますねえ。」とか「最近の子どもたちは人の痛みが分からない。」とか嘆く声が多く聞かえてくるが、そういった、「内的成長」の次元を無視し、私たち一人一人の尊厳、かけがえのなさへの配慮を欠いた哲学で成り立っている社会が、「人の痛みが分からず」「思いやりを欠く」人々を生み出し、様々な深刻な問題を引き起こしているのはあまりに当然のことなのである。

とすれば、私たちの社会に今必要なことは、私たちの「生きる意味」をめぐるコミュニケーションの豊かさを取り戻し、「内的成長」を促す社会を再構成することだ。それは、個人のレベルで言えば、私たち一人一人が自分自身の「内的成長」への感受性を高めるとともに、他者の「生きる意味」への配慮ができる人間となることであろう。そして、社会的には、そうした個人レベルの意識に支えられながら、私たちの「生きる意味」を育むような中間世界、コミュニティを再創造することである。

第二次世界大戦の敗戦は、「異なる意味を生きる人」への配慮を基軸にする社会への転

換の好機だったと言える。しかし、実際はその後の経済成長時代における破竹の「勝利」<sup>\*</sup>によって、誰もが右肩上がりを求めて生きるべきだという、同質的な「生きる意味」を疑わない社会が温存されてしまった。そして、その社会のあり方は、日本国内の異質なものの固有の「生きる意味」を生きようとする人たちを抑圧し続けてきたのである。

私たちが今目指すべきは、かつてのコミュニティーの回復ではない。過去の美質を受け継ぎながらも、その抑圧構造をいったん破壊しそれをリメイクすること、再創造することが必要なのだ。

それは「私たちの生きる意味を育むコミュニティー」である。「ワクワクすること」を発見し、他の人の「ワクワクすること」と刺激し合って、<sup>\*</sup>相乗的に実現していくようなコミュニケーション。そして、「苦悩」が受けとめられ、<sup>\*</sup>深い実存的なコミュニケーションの中から自分の「生きる意味」を発見していけるようなコミュニケーション。そうした「内的成長」をもたらすコミュニケーションの再創造が今こそ求められているのである。